

## 第1回県立高等学校あり方検討会 議事概要

### 1 日 時

令和6年（2024年）7月16日（火）午前10時から正午まで

### 2 場 所

熊本県庁防災センター1階101・102会議室

### 3 出席者

松下琢委員、田中尚人委員、櫻井一郎委員、永田佳子委員、森紀子委員、岩本悠委員、中村亮彦委員、末松直洋委員、吉良智恵美委員、田中篤委員、竹下文則委員、宮嶋久美子委員、長尾浩委員、平岡馨委員、村上正樹委員、山口法子委員、濱石浩二委員（計17人）

### 4 概要

#### (1) 開会

#### (2) 教育長挨拶

#### (3) 出席者紹介

事務局が出席者を紹介し、設置要項第6条第2項の規定に基づき、本会が成立することを報告した。

#### (4) 日程説明

事務局から本会全体の予定について説明した。5回程度の検討会議開催と並行して県内24カ所で地域意見交換会を開催予定であること、必要に応じて学校視察を実施すること、令和7年度中旬頃を目途に提言を取りまとめることを説明した。また、スケジュールは議論の状況に応じて変更となる可能性がある旨を併せて説明した。

#### (5) 設置要項及び運営要領（案）説明

事務局が設置要項及び運営要領（案）の説明をし、同要項及び要領に基づいて本会を進めることについて委員の了承を得た。

#### (6) 会長・副会長の選任

設置要項第5条第1項に則り、会長及び副会長を選任した。委員からの意見がなかったため、事務局から松下琢委員を会長に、田中尚人委員を副会長にすることを提案し、異議なしで了承された。

### 【松下会長挨拶】

私はこの3月まで崇城大学の方で教育担当副学長に従事していた。教務部長から合わせて大体12年ほど教育関係のことを大学でやらせていただき、特に今の大学での教育改革、それから高大連携・高大接続というところも担当してきた。先ほど冒頭で白石教育長からもお話があったように、相当にこれから子どもの数が減っていくという状況の中で、高校への進学率はほぼ100%、大学への進学

率は、今50%程度。ということは半分の子どもたちはいわゆる高校での高等教育が社会に出る前の最後の砦になっているということ。子どもたちのためにも、またその高校というのが地域にとっても大切な存在であるということもお話があったと思うが、ステークホルダーとしては子どもや、そして保護者、そして教職員、地域というその4つのステークホルダーが皆で協力をして、人口減少社会の中で高校の教育をどういうふうに考えていくかということをはじめとして、何か案がありきではなくて、この検討会を通して皆様から意見や知恵を出していただいて、それを取りまとめていきたいというふうに思っている。それぐらい今回のこのあり方検討会は大変重大な任務を負っているのではないかと認識しており、大変身の引き締まる思い。どうぞ御協力のほどよろしくお願いする。

#### 【田中（尚人）副会長挨拶】

この度は副会長に選任いただき感謝申し上げます。僕は、生まれは京都で、熊本には19年前に来た。熊本大学工学部土木建築学科で、土木史という土木の歴史を専門にしており、教育と一体どういう関係にあるのかと、皆さん御心配されているかと思うが、僕は前回の高校あり方検討会でも実は委員を務めた。コロナ禍で当該委員をやらせていただいて、世の中の当たり前がすごく変わったなというふうに感じた。今年は1月1日に能登半島地震もあって、僕達土木という分野は、皆さんの安心安全を守るという仕事をしており、教育関係の皆さんにも近しいものを感じている。僕は学校のことを学校だけで考えないことが大事なのではないかと。もっと一般の皆様、親御さんだけではなくて、普通の皆さんが学校は大事だなというふうに思ってもらえるような世の中になるのが大事なのではないかということで、主に社会教育とかそういった立場からこの検討会で発言していこうと思っている。是非、この検討会だけではなくて、日頃、街中で熊本の高校はこうあった方が良くというような議論が巻き起こるように尽力していきたいと思っている。よろしくお願いする。

#### (7) 議事

##### ①会議の公開・非公開について

#### 【松下会長】

設置要項第9条により、事務局が提示した案を正式な運営要領とすることを確認した。

#### 【事務局】

運営要領第5の規定に則り、冒頭で公開・非公開を協議することを説明した。

#### 【松下会長】

本日の会議を公開とすることを提案し、異議なしで了承された。

## ②協議依頼事項について

### 【事務局】

次第等冊子1 1 ページにより協議依頼事項を説明した。

## ③魅力ある学校づくりに向けた14の取組の検証について

## ④県立高等学校の魅力化に関するアンケート結果について

### 【事務局】

検討資料1により、令和3年3月にあり方検討会から提言された魅力ある学校づくりに向けた7つの方向性と14の取組並びにその成果と課題について説明した。併せて、検討資料2により、令和5年度に実施した「県立高等学校の魅力化に関するアンケート」の結果や、中学校・学習塾へのヒアリング結果を説明した。

### 【松下会長】

それではこのことについて、御自由に御質問や御意見をお願いしたい。

### 【田中副会長】

前回の検討会も委員として参画したが、魅力化の取組は非常に素晴らしいと思っている。特に八代中高のバカロレアや高森のマンガ学科といったこれらの先進的な取組には、先生方と生徒の皆さんの努力もあると思うが、やはり自治体の協力がすごく欠かせないのではないかと。

今まちづくりにとっては、本当に高校生が欠かせない存在であり、田中篤委員がおられた上天草高校がある上天草市や玉名市、菊池市など、本気で高校の魅力化に取り組んでいるところは必ず自治体の協力があると感じている。一方で、あちこちで人員が不足しており、先生方も市役所の皆さんも大変で、そこを県の皆さんが、サポートしてやっておられるのだと思う。

また、以前、奄美の大島高校に出前講義で行った際に、高校生に対するアンケートを見せていただいたら、高校卒業後に一度島から出る子が多いが、「島に帰ってきたいですか」という問いに対して、100%帰ってきたいと答えておられるのを拝見した。先ほど会長から高校が最後の砦という話があったが、それが今だんだん降りてきていて中学校との連携とか、そういったことも大事になってきていると思う。

さらに、先ほどの会長からの協議依頼事項の2つはすごく重いという話を受けて、この「将来を見据えた学校規模・学校配置の考え方」というところには、僕は「地域における高校のあり方」という思いが必要なのではないかと考えている。教育行政と一般行政の融和というか、庁内連携というか、県は大きな組織でなかなか大変かもしれないが、自治体においては今、教育委員会と一般行政の協働っていうのもすでに始まっている。そのあたりについて何か進展や状況の変化があれば教

えていただきたい。

#### 【事務局】

この地域との連携という部分は我々も意識しているところであり、傾向としては、地元自治体の中に唯一の高校がここしかないというところほど、やはりその県立高校に対する御支援の思いが非常に熱いと感じている。例えば高森高校の高森町や矢部高校の山都町、他にも芦北町や上天草市など、大きな御支援をいただいているところはかなり多く出てきている。学校だけでは成し得ないというところはまさに同感であり、今後の魅力化の方向性ではまさにその部分が強く出てくるかと思っている。

#### 【田中委員】

先ほど、田中副会長からまちづくりにとって高校生は欠かせないというお話をいただいたが、高校の教育にとっても、今、例えば総合的な探究の時間では、学校の枠にとどまらず、地域の方に協力をいただきながら高校の学習活動を進めており、高森高校などに限らず、いろんな学校で、地域に協力を受けながら、高校の教育活動を進めているという現状がある。生徒が地域の方々と接することで、その地域に対する思いを実感として持っていくような、そういう効果が見られている。何よりその地域の課題を考えるということは、高校生の思考力を高めたり、どうやったら自分たちが協力できるか、その解決に向けて何ができるのかを実際に考えたりするなど、大変良い学びの場になっている。

#### 【松下会長】

今の田中委員の御発言を受けて、例えば、先ほど事務局から説明のあった、魅力化に関するアンケートの5枚目のスライドにある中学生生徒アンケート結果概要を見ると、熊本市以外の生徒が熊本市内の県立を志望する要因として、「進学に必要な学力が身につく」が全体と比較してプラス16.7ポイントと第2番目に挙がっている。大学の教育を担当してきた立場で少しお話させていただくと、今、全国の大学で少しずつ変化が起きている。それは、高校の進学指導要領が変わり、先ほど田中委員が言われた探究活動は、どうしてもやらないといけない項目になっている。探究活動を通して主体的に学ぶ力をつけるとか、自主性を育てるということだと思うが、大学がどういうふうに対応しているかということ、東京大学も含めて全国の私立大学も国立大学も、私立大学のほうが先行しているかもしれないが、いわゆる年明け入試の1点2点で決める大学の科目入試から、年内のAO入試の方に明らかに今シフトしており、その割合が増えてきている。崇城大学でも大体年内入試が今までは2割3割で、メインは年明けの科目入試だったが、やはり年内入試の方が今3割から4割ほどと、少しずつ増えてきている。これはおそらく全国的な傾向だと思う。

まだ中学生には伝わってないかもしれないが、多分これからは大学への進学も、

いわゆるその学力、要するに1点刻みの記憶力に頼った学力よりも、考える力とか、自分が何をしたいのかとかといったことをいかに育ててきているかというのが評価の対象になるというふうに、多分10年先ぐらいにはそれが相当定着していくのではないかと。日本の国全体が、VUCA（ブーカ）の時代に、要するに先の見えない時代に、課題を解決できる、見つけて解決できる人を育てていかないと、日本の国自体が成り立たないので、アントレプレナーシップの方にどんどんシフトしていると思う。

だから、そういった意味でも今の御発言は意義があり、高校魅力化の推進において、どうやってそこをちゃんと明確に示していけるか、あるいは地域の方にとっての魅力化に繋がっているのかというところを、何らかの形で評価をするという作業をしていかないと、見える化に繋がっていかないと、それが繋がっていくと、地方のいわゆる熊本市外の高校でも、そういった生徒が育っていくということを「見える化」していけば、1つの最大の魅力になるのかなという気がする。大学入学とそれは繋がってくるということ意見を意見として言わせていただいた。

#### 【竹下委員】

先ほど、教育委員会から、魅力化の取組の主な成果について、これをやったという説明はあったが、それによってどういう成果があったのかという検証がなかったように思う。いろんなことをやった、その結果で、どういう成果が得られたのかを教えていただきたい。

#### 【事務局】

はい。主な成果に関して、まず1つ目に挙げたスクール・ミッションとスクール・ポリシーについては、最上位の高校の存在意義とか、社会的には役割を明確にするという意味で、そこから例えば、カリキュラムであったり、学校の特色だっただけに繋がっていくといった考え方が定着してきたところ。2番目に挙げた熊本スーパーハイスクール(KSH)構想は、3番目の情報発信の部分にも繋がってくるが、KSHの全体発表会、学びの祭典というのは、グランメッセで2,000人から3,000人規模ぐらいの研究発表会になっている。地域の方々や中学生、小学生に、県立高校がこんなことをやっているというのを発表する場を実現できたことも1つの成果と考えている。それらがどのような成果にというのは苦しいところもあるが、情報発信に加えて、高森のマンガ学科に代表されるような、特色ある学科に入学志願者が増加しているということも成果として挙げられる。成果と課題を踏まえて、次の魅力化の取組の方向性などに繋がっていければと考えている。また次回以降、より細かな部分は、説明させていただきたいと思う。

#### 【松下会長】

なかなか難しい回答だったと思うがいかがか。その成果について、もし可能であれば、具体的な数字として何か示せるものなのかどうか。そういうところで、もし

追加のことがあれば、次回でもまたまとめていただければいいかと思う。竹下委員、それでよろしいか。(はい。)

魅力化の推進をしたことによって、実際に熊本市外の高校などへの進学者がどう変化したとか、竹下委員の御質問の意図はそこにあるのかと思う。

#### 【岩本委員】

今の論点は非常に重要なポイントだと思う。現状や課題の把握、成果や取組の検証。今後、地域の意見交換をされる際にも、こういった情報、データやエビデンスというところがとても重要になってくるかと思う。私はいろんな都道府県のこういった高校再編などに関わらせていただいているが、個人の思い込みや、今までの経験、昔のイメージだとかというものをもとに議論が進んだり、それから声の大きい人というか、何を言っているかより誰が言ったかみたいなことに左右されたりというようなことが往々にしてある。やはり、こういう問題は、感情的になる部分もあるし、皆さんそれぞれ立場も背負っているので、今回いろいろとデータを出していただいているが、今後に向けてこういった観点でのデータや情報があると、議論が進みやすいのではないかというところに限って何点か、申し上げさせていただけたらと思う。

まず1つ目に入学のところで行くと、今回中学校の校長先生のアンケート結果概要の中でも、「公私立や学校の立地にかかわらず自分に合った高校への進学」というのに近年志向が高まっているとか、「私立高校への進学」や「通信制の進学」などの志向が高まっているという結果が出ているので、例えば、熊本県内において中学校を卒業する段階で、熊本市外から熊本市内に行く生徒の割合が増えているのか、減っているのかといった推移、逆に熊本市内の生徒がどのくらい市外の学校を選んでいるのかという市内市外の動きというところが1つあるかと思う。

次に公私について、公立と私立の高校へに行く生徒の割合の推移がこの10年でどうなっているのか。あとは全定通について、今広域通信制が全国的にかなり影響力を持っているが、その通信制への入学傾向の推移。また、今回も少し出たが、県外から来る生徒と逆に県外へ出て行っている生徒はどのくらいになっているのかという、こういったデータは、できる限り示していただいて議論するというのが大事かと思う。

それから、熊本市外の高校に関しては、定員充足率というのがかなり強調されて出てきているが、地元には1つしかない高校の場合、少子化で定員の充足ということだけ言ったらおそらく充足し続けられないということが普通に起きるし、多くの高校は、定員を充足させて、高い倍率を出そうということを考えていない。どちらかという地元最後の砦として、どんな生徒であっても、最後、この公立高校で受入れて育てるといってそういう気概を持ってやられている高校が多いのではないかと思う。そうしたときには定員の充足率もそうだが、地元中学校からの進学率の推移がどうなっているかが大事になってくると思う。

一方で、熊本市内の高校の場合は、逆に、おそらく充足率がある程度充足してれ

ばいいという問題ではないかもしれない。特に、熊本市内の進学校の場合は、規模が大きい状態がずっと続いているので、もしかしたら入学する生徒の質が大きく変わってきているかもしれない。昔のイメージだと進学校だったかもしれないが、今はもしかしたら状況変わっているかもしれない。それは例えば、入試の点数などを見ると、希望はある程度充足していても、質は変わっているかもしれないということが、熊本市内の進学校なんかでも、もしかしたら見えてくるかもしれない。これらが高校の入口のところの話の数字かと思う。

それから2つ目に高校卒業後の出口の情報というところでいくと、今回地方創生の観点からということがうたわれているので、例えば各県立高校から県内に進学している数と県外に進学している数、あとは県内に就職している数と、県外に就職している数という、ここが熊本市内・市外含めて、それぞれどうなっているのかというようなことや、高校を卒業して5年後ぐらい(大体23~25歳ぐらい)で、熊本県内にいる人口が高校卒業する時点と比較して25歳時点でどのくらいになっているのかといった数字が見えると、高校卒業の時点で多く県外に進学で出ていると思うが、そのうちどのくらいが帰ってきているのかというようなこともある程度見えてくる。そうすると、もしかしたら、熊本市外から市内へという流れが高校時代に起きていて、熊本市内に行った子たちは今後、県外に出て行って帰ってきてないとか、そういう大きな地方創生における、県内の構造みたいなものがその数字で見えてくる可能性がある。そういったところは、出口で重要かと思うし、先ほど松下会長からあった年内入試と年外入試の割合も近年においてどうなっているのかというのが重要になってくるかと思う。

3つ目は中身について。高校3年間での生徒の意識だとか行動がどういうふうに変化していつているのかということも、もしあれば今後重要になるかと思う。例えば、熊本市内の進学校とかであれば、もともと意識が高い子が入ってきているかもしれないが、それが3年間で横ばいもしくは落ちているかもしれない(わからないが)。一方熊本市外の小規模校は、もともとの意欲や何かは低かったかもしれないけれど、3年間で上がってきているということがあるかもしれないというときに、ある一時点を切って、やっぱり熊本市内の高校はこう、市外はこうと言っても、それは実態ではない。本当は高校の3年間でどれだけ伸ばしているのかというのが本当の教育力だと思うので、そこをちゃんと小規模校も含めていい意味で評価していくためには、その変化、ちゃんと推移を見て本当に小規模校には教育力がないのか、小規模校だとできないのか、というようなことも含めて検証するのであれば、そういった数字もとれるようにしていく必要があるかなと思う。

最後に、先ほど話のあった地域との連携が重要だということでは、県立高校に対して各市町村はどのくらいの予算をつけているか(例えば、コーディネーターに関する予算をつけているかなど)、また、サポートやコミットメントの高さレベルは近年変化してきているのか、積極的に協働している自治体はどこで、していない自治体はどこなのかといったところを、ある程度「見える化」しては。各地域

で意見交換をしていくのであれば、そういった市町村側の予算についても、ある程度オープンにしながら市民、町民の皆さんを含めて議論していくことが今後大事なのかなと思う。

#### 【櫻井委員】

今回は、本質的な話をする会だと思っているので、あまり小さい話はやめましょう。今までの議論を小さい話と言ったら失礼かもしれないが、子どもたちが減っているということを前提にすると、今の公教育のやり方がもう無理だということはみんなわかっている。進学校を卒業する子どもたちは大学に行って、世の中に出る前に勉強する暇があるが、先ほど会長がおっしゃったように、半数の子どもたちは、高校卒業して社会人になる。その社会がどうなっているかと言ったら、S o c i e t y 5. 0の世界。私は専門だからよくわかるが、ものすごい勢いでA Iが進化している。そして今までの仕事というのが、ほとんど半分ぐらいなくなるのではとされている。新しい仕事も生まれてくるでしょうが、その中でちゃんと生きていくためにはどうするのかって、我々はどんな人間に育てるつもりなのか。そのために県立高校はどうあるべきか、といったことを議論しないといけないと思う。

学校規模とか定員の話が出ているが、これは中央教育の話で文科省がやる話。しかし、地方教育の話は県議会と市議会、そして県や市の教育委員会が地域の実情に合わせてやるようになっている。その県教育委員会は、教育基準の設置と、教育施設の設置・維持・管理、そして、教育と学術と文化活動を行うとなっている。つまり、地方創生とかというのは教育委員会の仕事の中に入っていない。でもそれやらなきゃいけなくなった。どのようにやっていくか、それもちろんルールを決めて、ちゃんと粛々とやっていけるかということはこの場で議論したいというふうに思っている。そのため、ぜひ、ゼロベースで考えて、そして、18歳で世の中に出ていく子どもたちが安心して生活ができるような教育はどうあるべきか。ある意味、進学校は、次に大学という学びの場があるのでまだいいかもしれないが、この高校を卒業して社会人になる子どもたちの教育をどうするか。ということは、ぜひ議論していただきたい。

学校配置とか学校規模とか、定員というのは、文科省も問題意識を持っているので、熊本県が手を挙げてモデルでやりますと言えば、もしかして認めていただけるかもしれない。そうすると、ものすごい改革ができるかもしれない。ただそうなったときには、先生の負荷がものすごく上がるし、そもそも先生の採用基準から変えなきゃいけないというような話になるかもしれないが、そこまで突っ込んで議論をして、この会議が実りある会になればいいなと思っている。

#### 【松下会長】

それは私も全く同意見。ただ岩本委員が言われたように、これから24ヶ所の地域を回って説明をしていく上で、竹下委員からも御質問していただいたように、多分教育委員会だけでは収まらない。連携の上で、数字が出てくるようにならない

と、先ほどの就職とか、必ずしも、教育委員会だけの部署でデータが集まるかわからないが、あとはUターンとか、そういったところをぜひある程度やっぱり数値として説明が見える化した上で、24ヶ所のヒアリングというか、面談というか、相談をしていかないと、なかなか難しいのかなというふうに思うので、ぜひその辺は事務局の方で、やれる範囲でお願いしたいと思う。

今、櫻井委員が言われたことはとても本質的なことで、本当にそうだと思う。生きる力をちゃんと身につけられるよう育てていかなければいけないが、クラス数が減っていったって、1クラスになってしまったら、例えば、国語・数学・英語の先生はおられるかもしれないが、社会とか理科科目の先生はもう配置のしようがないということも起こりえる。だからその中でも、高等教育を守っていくための大きなビジョン、これには多分いろんなことが関係してくると思う。大学では今、クロスアポイントが進んでいるが、要するに1つの高校にだけ先生が所属しているのではなくて、例えば地域内の他の学校と連携して教えに行けるとか、遠隔授業もそんな中に入ると思うが、本質的なことをそこまで考えていかないといけないと思う。

熊本は中核都市の1つでもある。他の地域に比べたらそんなに人口減少が激しいわけでもないかもしれないが、その中で格差が起きているとうことでそれを解決するためのビジョンを示せれば、これは全国に普及するような提言になるかもしれないと私も思っているので、ぜひ皆さんでいい意見や知恵を出していただいて、この会としての提言を取りまとめていければと思う。それでは次の議事に行きたい。積み残しの部分は事務局の方で、次回、御説明をお願いする。

では次に、県立高等学校の現状、課題等について、事務局から説明をお願いする。

## ⑤県立高等学校の現状・課題等について

### 【事務局】

検討資料3により、これまでの経緯や現状・課題、具体的な検討テーマについて説明した。

### 【松下会長】

先ほどからの意見に対する回答も資料の中に少し入っていたかと思うが、それではこのことについて御自由に御意見をお願いしたい。また事務局案に対する疑問点や質問があれば、どうぞ出していただければ。

### 【末松委員】

私は熊本市外から選出の県議会議員で、いわゆる宇上学区、宇城・上益城の学校を抱えている者であるが、定員割れが続いている学校がある中で、先日、人口戦略会議の中でも消滅可能性のある自治体として18市町村が入っていたところ。そのような中、正直なところ、もしこの学校再編の議論で地元の高校がなくなったら、という懸念をすごく持っておられる方がいる。やはり先ほどのアンケートの中でもあったとおり、熊本市外の学校から熊本市内の学校に行った生徒の中には、地

元の高校では定員割れが続いており、倍率が低い、学力が近い人と切磋琢磨をしたいということがあり、多くの生徒が宇上学区から熊本市内の学校に行っている。交通の便が良いということもあるのだろうが、いかに地元の自治体を含めたところで考えていけるか、すごく危機感を持っているのは私の地区だけではないと思う。

安易に学校再編をするのではなく、やはり、先ほどから何度も出ている高森高校のマンガ学科。実は、数年前までは県の教育委員会が勝手に（と言ったら失礼だが）マンガ学科を作ったのかなと私は思っていたが、実はそうではなかった。県の教育委員会や高森町、関係者が皆、綿密な協議をしながらこのマンガ学科ができたという中で、やはり市町村の役割はすごく大きいものではないかと思っている。

定員割れを抱える学校の自治体との協議ではどのようなお話をされてきたのか、できれば、次の会議でもよろしいので、そういったところも示していただければ、私たち県議会議員も、何かやり方が見つかるのではないかと思っている。

先ほどから申し上げているように、あそこの高校はなくなるのではないかという噂まで出てくるような状況。まだまだ、実は宇城市は5万7000人の人口がいる中で、どうしても熊本市周辺部のため、やはり生徒が熊本市内に多数行っている。これは単に地元の行政、そしてまた、県だけでは解決できない問題だと認識している。我々県議会としても、是非とも何らかの力を発揮していきたいと思っているので、どうぞよろしくお願いしたい。

#### 【松下会長】

前回の地域との対話がどんなものであったかについて、一つ質問があった。もしそういう資料が残っていれば、次回のときに示していただければと思う。

#### 【竹下委員】

最後の20番目のスライドのところについて、中ほどに書いてある「相反する課題」に対して、2つの観点があり、教育の充実というのが掲げられているが、これは、何をもって測られるのかなというのが少し思うところ。先ほど岩本委員からもあったとおり、小さい学校でも、子どもたちを育て上げて立派に地域に貢献されている学校もある。そういう学校は評価されるのか。ただ、定員を満たせないところが削られていって、そういうふうにするのか、そうではなくてどうするのか、今、国でも少子化なのでワーキンググループをつくり、あり方検討の場を設けて同じような議論をされている。

小さい学校では遠隔の授業をしたりとか、熊本市では、大きい学校だが定員を減らして見合ったコースの教育活動ができるようにしたりといったこともされていて、お金をどういうふうに投資するかということも大きいのかなと思っている。だから、今40人で1クラスという概念の中で行われているが、少ない人数で教員をきちんと配置すると、小さい学校で先生方が、全部の教科が揃わないというような環境も改善できるところもある。

だから、教育の充実がどういう指標で評価されて、それをもとに、どう作ろうと

しているのか、小さい学校の課題はこれからどんどん出てくると思うが、定員を考えたり、いろんな情報技術もあるのでそれを活用したりしながら、その間、教育の環境を整えて、人材育成をさらに強化しながら、地域と連携していくのがいいかなと思っている。ただそれにはお金が必要なので、国の標準法とかが変わったりしていけば、また変わる部分もあるだろうとは思いますが、そこにどういうふうに投資をしていただいて、地域になくってはならない学校ができるのかっていう、やはり教育の充実に対する考え方というか、指標というのは重要なかなと思っている。

**【松下会長】**

事務局いかがか。今の御質問に対してはお答えが可能か。例えば定員、1学級の人数の問題とかっていうのも今、御提案としてあったかと思うが。

**【事務局】**

はい。募集定員に関しては、標準法との関係が出てくる事項であり、ただそうは言いながらも課題に挙げているように、ここはなくてはならない存在という部分と、本当に現状のまま維持できるのかという部分は、難しい課題だと思いながらも、そこは今回、きちんと目標と具体的な取り組みを考えていく必要があると考えており、今言われました点についても、次回の具体的な取り組みとして、検討しているところ。

**【松下会長】**

はい。なかなかお答えが難しいと思うが、1つの例を挙げれば、大学では、ディプロマポリシーというのはいま大分前から定めているが、教学マネジメントというのが今始まっており、要するにディプロマポリシーがどこまで達成されているのかというのを「見える化」する必要があるということ。それは今の竹下委員の御質問にあてはめれば、スクール・ミッションを全高校でしっかりと決めたというのが前回の提言を受けて起こったと思うが、そのスクール・ミッションはどこまで達成されているのかというのを評価しているのか、ということかと思う。スクール・ミッションというのは、高校によってそれぞれ違っているもの。先ほど岩本委員が言われたように、地方の小規模の学校であれば、トップレベルを育てるというのではなくて、例えば、入ってきた生徒の3年間で学びがどこまで伸びたかを評価するとか、それをミッションにするとか、いろいろあっていいと思うが、そういうところも、多分まだまだこれから、どこの県の高校でもきちんとできてないことだと思う。そういったことをしっかりやっつけていけば、そういう教育の充実の定義っていうお話だったと思うが、そういったことも見えてくるようになるのかなあという気がする。このミッションを定義するだけではなく、それを今度は評価していくということも必要なのではないかと思う。

**【村上委員】**

私は、県PTA連合会の会長であり、第二高校のPTA会長をしており、子ども

は熊本市外から通っている。熊本市外の方が熊本市内に行くというのが言われている中で、例えば先程の宇上地区で、10%ほど流出が増加したということだったが、個人的には、10%転出する世帯を食い止めたのではないかというふうに感じている。保護者、中学校、小学校でもそうだが、子育てする世代としては、子どもに何とか多くの選択肢を持たせたいと思う。どうしても便利がいいところに住みたい。核家族化で自分が住みたい市町村を自分で選ぶ時代になっている中で、通学区域がどうなっているかというのは、熊本県民であれば、考えることが大きいのかなというふうに思っている。この10%増えたというのは、結果的には、生徒が熊本市内に行ったような感じがするが、世帯的、保護者的には、子どもの選択肢が増えるというのは、非常にありがたいことなのかなというふうに思っている。そもそも、やはりそこに住む人たちが増えないことには、なかなか、熊本市内から市外に通う、たくさん通うというのは難しいのかなと思うので、熊本県内でも人口が減っていると言っても、増えている、増えていく自治体があるのは事実だと思うので、そういうところに集中しないような施策をとっていただいて均等になっていけば、高校教育、入学者数には少しは影響してくるのかなと思う。

#### 【松下会長】

今村上委員の言われたことも、実は本質的なことだと思う。日本国憲法にあるので、教育の機会均等というのは、絶対にどこの地域に生まれても権利がある。けども今のこの減少の状況というのは、それさえも危うくなってくるという、先ほどちょっとお話ししたが、中央の熊本市内の子どもたちにとっては、クラスが充実していて、いろんな教科を受けることができるけれども、それをそのままにしておくと、熊本市外の高校のクラスが減って行って、そして受けた科目が受けられなくなるといったことが懸念される。これは、教育の機会均等というのは、中央だけでできていけばいいのかという問題とも関係してくると思う。非常に大きな御提案の1つだったと思う。

#### 【吉良委員】

私は町村教育長会の代表として参加させていただいている。町村教育委員会は、義務制の小学校・中学校の教育に関する管理、県立高校になると高校なので県の教育委員会の管理、そういった点で教育の施策であったり、連絡であったり、あるいは情報の共有であったり、義務制のレベルと、県立のレベルがどうしても分かれてしまう部分がある。校長時代、それから今の教育長時代を考えた時に、大津町なので町内に県立高校は3校あるが、なかなか地元の高校の取組の情報が入らないというのは、ずっと感じていた。幸い、教育長になってからは、学校運営協議会の委員として参加させていただいている県立高校の情報は入るが、そうでないところの情報はやっぱり入りづらいという現状がある。

一方で、先ほどから話が出ているように、その地域との連携だったり、あるいは小学校中学校時代から、県立の子どもたちとの活動の繋がりだったりは大変重要

であると私も思っており、学校運営協議会でも意見を出させていただいたこともある。やはり地元の小学校・中学校の子どもたちが、地元の高校のことを知り、その生徒との交わりを深くしていく。そうすると、あの先輩がいるところに行きたいなと思ったり、ああいう活動をしているんだ、ということを感じたりしながら、自分も高校に行って、こんなことやりたいなと言ったような思いが広がっていくと思うが、なかなかその機会がなかったような気がしている。

ただ最近では、地域との繋がりというのをそれぞれの高校も意識されているのか、以前に比べると随分と様々な部分で、情報提供であったり、あるいは活動の連携であったり、地元での活動というのが、肌で感じるぐらい増えているなど思っている。そのため、良ければ、今後の小中学校との連携や地域との繋がりといった部分で、地域ごとの情報共有、施策の検討会とか、そういったものを県立高校という線引きじゃないような形で、やれる場があればいいと思う。

#### 【松下会長】

大変重要な貴重なコメントだと思う。

#### 【田中副会長】

今の吉良委員のお話はすごく大事だと思う。僕自身も教員なので、評価というのはすごく大事だと重々思っているが、一方で、例えば「働きがい」といった部分、もちろんお金は大事だが、お金じゃない部分が特に大事になってくるのではないかなと思う。いくつか学校評議会をやらせていただいているが、常に申し上げるのは、やっぱり先生の働きがいが大事だということ。子どもたちは、先生方をよく見ているので、まず先生が、働きがいを持って生き生きと働いておられる学校かどうかというのが、評価されていいと思うが、その評価というのは非常に難しく、そんなに短期間に評価できることではないと思うので、それぞれの地域でそれぞれに合った評価の仕方があって然るべきかと。それは横並びじゃなくて、それぞれの地域に応じて、それを束ねている県としては、熊本モデルみたいなことを考えていくぐらいの気概があっただきたいなというふうに思っている。今多くの委員の皆さんがちゃんと評価するっていうのは、岩本委員からも言っただきまして、それはもちろん大事だが、一方そうじゃない測り方、それはたった2年では多分決まらないと思うが、この先10年ぐらいかけて、ぜひ熊本モデルというような、ここに書かれている教育の内容の充実と、地方創生の両面から、本当に高校があってよかったって、誰が言うのかっていうときに、子どもたちはもちろん、先生も地域の人達もあって良かったと思える評価のやり方を継続的に考えていかなければいけない。

僕もすごく期待しているのは、この24地域で行われる意見交換会。これは単に1回やって終わりということではないと思うので、できれば、学校運営協議会とかと連携して行って、今後熊本ではずっとこういうことを続けていく、それこそがサステナブルな学校評価かなというふうに思う。今日もこれだけ委員の皆さんが率

先して来てくださって、誰1人お金のためにやっていないと思う。そういうことを熊本モデルとして是非やっていただければということで、お金は大事だけど、お金ではない、「思い」はすごく大事だなと思う。

#### 【松下会長】

今1つ新しく出てきたのは、教職員もステークホルダーの一部だということ。やっぱり教職員が生き生きと働けなければ、結局子どもたちも生き生きとしないし、地域も生き生きとしない。保護者もそれに対して影響受けるだろうということだと私も思う。

本当に今、特に熊本市外の定員割れをしている高校では、先生方はものすごく苦勞されている。先日、菊池農業高校に行ってきたが、あの広大な農場に対して、本当に生徒さんが少ない。今までは実習としてできていたこともできなくなってきて、そうするとやっぱり先生方は過剰に働いて、その農場を維持しなければいけない。それももしなくなってしまうたら、一体農業県としての熊本はどうなるのだろうかとつくづく思ったところ。教職員のなり手もいなくなってきていると大学にいても非常に感じる場所。1年生は結構教職課程をとる生徒が多いが、どんどん減っていている状況。やはりステークホルダーの一員として、教職員というのがあると思う。

#### 【森委員】

幾つかお尋ねと感想をお話ししたい。今後、少子化が進み（中学校卒業者が）令和20年には12,000人を割り込み、（令和9年からの10年間で）4,500人減少するというので、学校が今1クラス40人とすると100クラス以上の規模で子どもが減るといこの現状を、ものすごくシビアに見なければならぬのかなと思っている。高校の魅力化をやっていただいているけれども、どうしてもかなりのボリュームで定員割れが出ている。それぞれの学区で事情が違うので、その理由はそれぞれの学区ごとに丁寧に見ていく必要があるのかなと思っている。例えば菊鹿学区でいうと、募集定員よりも、現状で中学校卒業者数の方が少ない。それは学校の数が多いからなのだろうと思う。そういうところと、やはりこの学校がなくなってしまったらもう物理的に通える学校がなくなってしまふということと、分けて考える必要があるのではないかなと思う。

一方で、その中でも、熊本子どもたちにはこのような教育を確保したい、（県立高校が）学校としてはこうありたいという目標というのを高く持つのも大事で、少子化のシビアな現実と目標との間の折り合いをどうつけていくのかというのが、これからの議論になる。その中で、地方創生と教育の充実を並べて掲げるとするのは、すごくチャレンジングなことだと思う。前回の高校再編では地域振興、地方創生という視点よりも、学校の適正規模というところで4から8学級を確保するというところを重視して議論がなされていたので地域にもものすごく軋轢を生んだという経験を熊本はしている。だから地方創生とこの両立を図るのだということ

のメッセージをしっかりと打ち出されたということはとても良いことではないかと思う。その看板を掲げて、24の地域を回られていろいろな御意見を吸収して、より良いあり方を探っていきたい。

質問を一つ。今回の検討会で議論した成果物を受け取った県教育委員会が今後のプランを作っていくと思うが、そのプランを高校入試に反映させる時期はいつ頃になるのか。

**【事務局】**

高校入試の改革についても、前回のあり方提言の中の14の取組の中に入っており、現在それに従って進めているところで、令和9年度から新しい入試制度になることになっている。今回ここで話し合ったことについては、その後の見直し、そういったところで生かしていくというような形になるかと考えている。

**【森委員】**

ということは、令和9年度の入試改革一本化と、時を同じくするものではないということか。

**【事務局】**

次回、具体的にその中長期の取組、スケジュール感や施策のイメージをお示ししたらもっと理解が深くなるかと思うが、入試のほかにも、募集定員のことなども含めて対比させて、協議ができればと思っている。

**【松下会長】**

よろしいか。実際にこの2年かけて、令和6年と令和7年で提言をまとめて、それをあと具体化されていくのに時間が少しかかるということかと思う。それが令和9年度ではなくてそのあとに反映するという理解でよいか。

**【事務局】**

内容次第になるかと思う。現在、令和9年度からの制度について今の中1生に周知したところのため、動揺を与えない程度で入るような方向が示されれば、それは反映させたいと思っている。

**【松下会長】**

それでよろしいか。(はい。)

**【櫻井委員】**

「高校は地域になくてはならない存在」というのは、例えば私は、教育委員として河浦高校の最後の卒業式に出席したが、正直、ものすごく考えさせられた。辛かった。そこでやっぱり、高校は地域になくてはならないなど、今思っている。ただ、これを叙情的な話や母校をなくすな、といった話では駄目だと思っている。経済的にも成り立たないといけない。

そこで1つの考え方として、学校の役割について、例えば熊本地震のときに、学校は当時、避難所に指定されていないところもたくさんあったが、県民皆先を争って学校に避難した。それに対して先生方は、自分の仕事ではないのに、安心できる避難所にするべくちゃんと対応された。そういったことを見たら、地域になくてはならない存在という意味がそこに1つあるかなと思う。生活安全保障という考え方を入れると、学校の存在理由が変わって、これはもうなくてはならない存在ということになる。そこまで広げて持っていくかどうかというのを議論する場にしていただきたい。

また、この地方創生というのは、今の学校によく言われるが、県立高校にこの地方創生の役割を担わせて良いものかどうか。とても違和感がある。だから、本当にやるのかどうかということもここで議論していただければありがたい。

#### 【松下会長】

櫻井委員から再編当時の御経験やつらい思いもお話いただいた。1つ前の森委員からも4,500人減少、40人学級で、100以上、110クラス減とか、というお話もあったが、一方で専門高校では1学科40人という学科もある。そういうところを1クラスなくすということは、学科を1つなくすということになる。農業高校にいたっては、必ず広大な耕作地が放棄状態になる。だからやっぱり、きめ細かくどうやって4,500人も定員を減らしていくのかということ、かなりいろいろ考えて実行していかないといけないと思う。40人で減らす場合もあれば、もうちょっと数を少しずつ減らしていくという場合もあるだろうということは感じた。

#### 【山口委員】

保護者目線の話になるが、先ほどの情報が届いていないという御意見の中で、保護者として今、中3の子どもがおり、最後の4人目だが、本当に情報が入ってこない。子どもが行きたいなと思う高校の情報は入ってくるが、親が行かせたいなと思うところの情報は、子どもは持ってこない。保護者を対象にした説明の場もあったが、本当に入試の説明のみという感じで、できれば、もっとたくさんの情報を届けたいというのがまずある。

それから、私の上の子3人は成人していて、実は皆私立の学校にやっているのであまり県立のことはよく分からないが、10年前と変わっていることというのを思ったときに、私は菊池高校出身だが、地元でいうと10年前はまだ保護者も菊池高校にやりたいという保護者がいた。結構成績優秀な子達もたくさんいたが、今はもうどうしても過小評価とか書いてあるが、本当にイメージが悪くなってしまっ、保護者も敬遠しがちになっている。実は菊池高校卒業なのだということも言いたくないという保護者もいるぐらい。私としては、それは少し悲しいことでもあるので良い評価をしていきたい。あと菊池高校普通科に未来探究コース、地域探究コースができたが、保護者の意見としては、高森高校のようなマンガ学科や、半導体な

どはわかりやすいが、何かよくわからないという意見が多く、それができたところで、ちょっと意味がわからないという保護者の意見は実はたくさんある。その情報もまず入ってこないというのが私の中にはある。

また、昨年、菊池南中の会長をさせていただいているときに、大津高校には文化祭に呼んでいただいたので、その学校の様子が保護者としては見えてきて、またそれを私も皆さんにお伝えすることができた。そういうことが増えていくと良いなと思っている。菊池高校は一度も呼ばれたことがなかったので、そういう良いところを他の県立高校もどんどん真似してやっていければ良いのではないかなという、本当に保護者の小さな意見だが、お願いしたいなと思っている。

#### 【松下会長】

冒頭で田中副会長の方から、こういう改革は学校の中だけで終わりがちという発言があったが、まさにそういうところだと思う。その地域との繋がりも含めて情報発信し、皆で考え、共有をしていかないといけないということ。

まだ御意見いろいろあるかと思うが、また次回、議論の場を設けられればと思うのでよろしく願います。適正規模の考え方や学級減、それから通学区域につきましては本日の委員の皆様のお意見をとり入れながら、次回までに事務局案を提案していただくこととする。また本日質問があった項目については、次回事務局より回答を願います。定刻の時間となっているので、特に御意見がなければ、以上で議事を終了する。たくさんのご発言に感謝する。それでは事務局にお返しする。

#### (8) 閉会

#### 【事務局】

長時間にわたる熱心な協議に感謝。今回の議論の内容については、事務局で整理し次回会議にてお示しする。また、本日いただいた御意見を踏まえ、事務局でおまとめた案についても、次回お示ししたい。

次回は冒頭に申し上げたとおり、8月の下旬に開催する予定としている。詳細については、書面にて御連絡を差し上げるのでよろしく願います。

これをもって、第1回県立高等学校あり方検討会を閉会する。